

中川根ふる里通信

= 第4号 =

編集・発行・モア・ラブ中川根
連絡先
静岡県榛原郡中川根町上長尾
930
中川根町役場総務課
ふる里通信係
TEL. 05475(6)1111
郵便振替口座(名古屋)7-81556

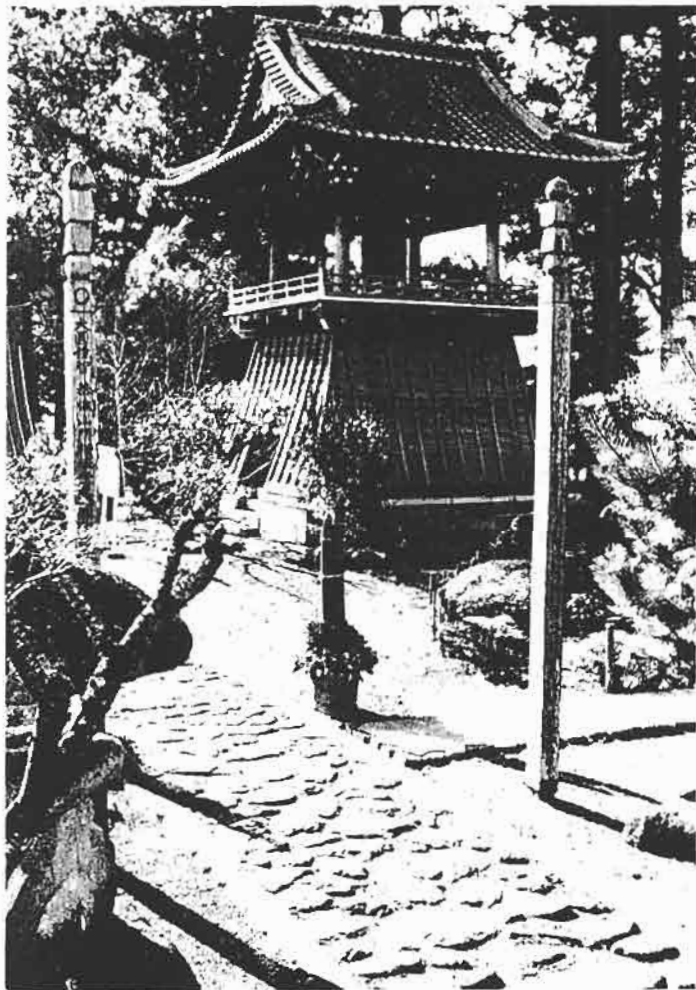
新年を迎えて

中川根町長 徳嶋 淳男

明けましておめでとーございませう。皆様には、ご家族お揃いで、健やかな新春をお迎えになられたことと心からお慶び申し上げます。

昨年は前年に引き続いて台風の襲来もなく、町内ではこれといった大きな災害が発生しなかつたことが、何よりの幸であったと思ひます。地域の皆さんをはじめ、町出身の方々からも、大きな関心を寄せられております。大井川の水問題につきましても、昭和六十四年三月に中部電力との大井川の水利権の更新期を三十年ぶりに迎えますが、一昨年遅く、

建設省と県において大井川中流域検討会、大井川中流域問題連絡会というような協議機関が設置され、また町自体においても議会当局のご尽力によって昨年は水利権更新対策協議会が結成されたところがあります。そして建設省の検討会、町の協議会では、それぞれ専門家グループに委託して大井川の現状と対策等について調査が進められております。双方共に先般ようやく中間報告が公表された段階であります。何れも未だ結論までには程遠く、資料不足の感じも免れない状況であります。一方、斎藤県知事も、就任後私共の積極的姿勢を示していただいた積極的姿勢を示して、十一月県議会では、河川の流況と環境改善を求める意見書



千葉県智満寺 鐘楼 写真提供、諸田秀男さん

人々に去りゆく時をふり振り返り、新年に望みを抱かせ、除夜の鐘の音が、静かにひびいた。

を採択していただいております。町といたしましては、「流域の安全と環境改善、河川本来の機能回復」という悲願がこの機会に是非とも実現出来ますよう、近隣町とも相携えて最善の努力をして参りたいと思ひます。町出身の皆様におかれましても、この問題に対する世論の盛り上げとともに、資料のご提供等についてご協力をお願い申し上げます。最後に、町財政の運営につきましては、今後一段とその効率化を計り、長期的に健全財政の持続を期して参らなければならぬと考へます。

中川根町の活力ある産業の基盤づくりには、また快適で安全な環境づくりにと、本年も引き続き精一杯の努力をして参りますこととお誓ひしますと共に、皆様方のご健康とご多幸、なうびに一層のご活躍を祈念申し上げまして、ご挨拶といたします。

母校は今

徳山小学校

その4



あたたかき、こころもてかの瞳
清き子等をみちびかむこの年もまた

小川千之

徳山小学校の教員たりし頃 大正十五年の
新年を迎えてよめる

大正のころの徳山小 奈良間辰夫

私は明治が大正と改元された年に生れ、大正が昭和と改められた年に、徳山第一尋常高等小学校を卒業した。大正の後半期が私の小学校生活であり、昭和の年数が私の小学校卒業以来の年数をあらわしている。

物覚えも悪く成績も平凡で通った私には、徳山小学校の思い出は遙かかたのもので、学校の勉強よりは身辺の雑事などが僅かに思い出される程度である。入学した時のことなどは全然おぼえていないし、どんな勉強をしたかもはつきりしない。

当時は成績の悪い場合や、健康のすぐれない場合は、学年がそのまま据置かれる落第ということがあった。三年生位の時、席を並べていた強力は友達に度々圧力を受け、毎日が憂うつて勉強も手につかず家へ逃げ帰ったこともある。その年の友は落第した。私は友達には悪いが解散された喜びと、世の中が明るくなったような感じを味った。勉強嫌いな私も落第のさびしさを身にしみて知った。その頃の私の家庭学習は大きな声で国語読本を少しばかり読むこと、書取などをすることが、閑の山で、もっぱら友達と組を作って遊んだ。「勉強するよりは家の仕事を手伝え」という気風が家庭にあったような気がするが、私は仕事のかわりに遊びを選んだ。当時の学校には、図書室もなく、又個人持ちの辞書参考書も殆どなかった。高学年になってから、振替郵便によって本を買ったことを覚え、東京大阪の書店から全科参考書などを取寄せた。それを丸写しにして学校へ持って行き、ノートを見ながら先生の質問に答えてはめられたことがある。研究心の乏しい勉強振りの思い出される。

学校の運動場が非常に狭かったのが思い出される。狭い校庭の片すみで上級生に遠慮しながら遊んだものだ。運動会は学校で出来ないもので、島の川原の石を拾い並べて競争用のコースを作り、幾日か練習にかよった。帰りに川原のぐみの実を取って、食べたり、砂地に生えた甘草の根を返り取って、かすがな甘さを楽しんでこともあった。

六年生の時に若い中野先生が学校長として赴任された。非常に積極的な先まで、もつと責任を持って随分とハッパをかけた。イタリアのムツリニ、アジスの勇ましい話を聞いたのもこの先生からである。間もなく学校長の努力と区民の協力によって狭い運動場がびつくりする程に張された。これが現在の校庭で川根で一番広い運動場が出来たと胸を張ったものである。この運動場でよく遊んだ。たすき取り、陣取り、陸軍遊戯、降参鬼など、みんなたのしい。相手をつかまぬ降参するまで攻めたてる降参鬼で、小柄の先輩がねじ伏せられ、こすかれ、頭を地面にこすりつけられても降参と言わなかった。すさまじい斗魂を、今でも先輩を見る度思い出す。学校が終れば、道ぶこが仕事である私達は竹製のハネ鉄砲を作り、集団で畑をふみあうし、川原を走り、山に登り、戦争ごっこを思い込んだものである。

忘れられないことに、大正十三年度の修学旅行である。この伊勢参宮旅行は今までにない大冒険な修学旅行であり、舟下りや便が唯一の交通機関である当時としては随分思い切った計画であった。半日大井川の舟下りを楽しみ、金谷駅のホームで始めて蒸気機関車を見た時は、その大きさと、まじい威力に胆をふるしてしまった。はじめの団体行動で名古屋、伊勢、静岡と宿を重ねて念願の参拝をすますと共に、世の中の広さをたしかめた。見る物聞くものすべてが山家育ちの私には驚きであった。



生きている。思い出の校舎 運動場は、ナイター施設もついている。区民の健康の場である。校舎は、老人クラブ委員会

1月15日 祝 成 人

天候 冬日和

成人該当者 109名、内成人式出席者 85名

町内在住成人 約30名

中川根町主催の成人式が行われました。町民の若い力への期待も受けて、おごそかに挙行されました。

成人の誓の言葉をつけて、風船が空高く舞い上りました。

ふるさと学級生による祝餅、やふり袖すかたが式をはなやかにかざりました。

成人された人達は、60年周期のひのえうま生まれ、全国的に出生者が少なかった、中川根町でも同じでした。少数精鋭、君たちは、慈しみ育てられ、今、大人の世界に入ったのです。

前途 洋 洋 な れ、 成 人 の 皆 様。



1月はいく、2月はにける、3月はさる、高校生が卒業するたびに、町の人口は、100人位、減って行きます。今年はどうなるのでしょうか……。



鈴木さん、いつもありがとうございます。ますますの御活躍をお祈り申し上げます。

地元の教育機関などに長年わたり、多数の図書を贈り続けていただき、図書室に鈴木文庫と別置している学校もあります。

八十三才の現在も、週三日集英社に出社されておられます。

携わり続けられました。鈴木さんの記録は、激動の昭和期出版界の生き証人といえ、貴重な作業として高く評価されており、決して平坦な成功物語ではなく、幾多の人物との出会い、そして挫折を経た、一出版人の達成の記録といえます。

昨年『日本の出版界を築いた人びと』に続いて、昨年末『わが出版回顧録』(いすれも相書房)を上梓されました。

十五才で川根を離れ(出身は田野口)六十有余年、出版事業に決って平坦な成功物語ではなく、幾多の人物との出会い、そして挫折を経た、一出版人の達成の記録といえます。

鈴木省三さん 自叙伝を出される!!



徳山、藤川、水川(一部)地区の小生が集う第一小学校。徳山駅前の旧田畑に、広い運動場と白い校舎



旧校舎を利用して、金谷林業事務所青種場内に、青少年宿泊施設、「山の子むら」があり、春夏、秋と県内から子供達が集まる。

年に四度の祝日には学校で拝賀式が行われた。晴着に袴をつけて式に参列した時の、心の引きしまるようなさわやかな印象が残っている。教室をぶち抜いた式場でおごそかな式が行われ、勅語奉読が終ると下げていた頭が一斉に上りとたんに烈しい鼻すすりと咳払いが起り、それから勅語奉答歌が始ったものである。式の後で順番に並んでもうた。お祝いの菓子も楽しみのものであった。当時は相当量の積雪が年に何回かあった。夜、積雪のための竹割れの鋭い音は胸に強く響いたものである。登校の朝、下駄の歯にかたまりつく雪のため、立柱生することもしばしばであった。今の川根高校の前通りは、長い間竹藪が続きたる通れば本当に淋しいところで、雪が降った後はいつまでも凍って通学の子供を悩ましたものである。

じっと心をとすまして六十年前の記憶の糸をたぐってみる。大雨の季節に桃沢が氾濫して野志本、正島の子供が通学に困ったこと。毎年学校のぼたん杏の突が黄色に熟れてくると上級生が沢山とって、全校生徒に分けてくれてうれしかったことなど、とりとめのないことがポロッと浮び上る。不思議と勉強の喜びと苦みの記憶が浮んでこない。当時は学校からも、家庭からも勉強の強制を受けない時代であったのかも知れない。

徳山小学校出版学校統合記念誌より 転載

ふる里のさらなる発展のために

ほそだ ひろし

「ふる里通信」の仲間のみなさんごきげんいかがですか。中川根町でも昨年春にオーブンをした「四季の里」が好評で順調な歩みが続けております。中でも「よむぎパン」「手打ちそば」「手造りコンニャク」などは「ふる里の味」をそのまま都会へ運べる格好の特産品として人気が高く、製造も受持っている。「ふるあいグループ」の人たちも毎日張りきってこれに取り組んでおります。

これはとても嬉しいことです。このころは国内のあちこちの村や町で「村おこし」運動とか「村一品」運動とかという名前で、特産品の開発や販売の動きが活発になってきております。これらの中には、村や町や中には県をあげて、ほう大な予算をつけてこれにとり組んでいるという恵まれた地区もあります。

取り上げ方はさまざまですが、その底に共通している願いは、(特産品の販売を通して経済的な充足を図る。ということももちろん、重要な願いではあります)自分たちの生れ育った「ふるさと」をより住みよいところにしよう、ということでありと同時に、その「ふるさと」を離れられた方たちにも、「私の生れたふるさと」は、こんな良いところなのです……と口に出してもらえるようなところにしたいという願いも、また込められているのだと思います。

ですから、先にのべましたように、「四季の里」の特産品が、たくさん売れることも、もちろん嬉しいことですが、単に、売ればよいというだけでなく、考え方の基本として忘れてならないことは、ふる里には、良いものがまだたくさんあるのだということと、地元の私たちが、まず認識し、それらを活かすやうと考えることとあり、町外のみならずからは、ふる里の「あるべき姿」の忌たないご意見を頂くこととあります。

そして、それらをもとに五年先、十年先のこの町の青写真を描きあげることであると思えます。つまり、「四季の里」の開発は、あくまでも「村おこし」のための出発点として捉えていくことが望ましいわけだ。

ただ、単に「四季の里」一店だけが繁昌すればよい、といったような偏狭で近視眼的な考えをもっていてはならないと思います。

ふる里、中川根に住んでいる人たちが、こころに動きを通して内外からの刺激や思いを受けられることが「村おこし」の本来的成果につながるのであり、この「ふる里通信」を始め目的にも添うことになるのだ、と私は考えております。そんな意味で、行政機関や、各種団体を含め、町内外の方たちも、「四季の里」の現在の活動についてもっと関心を持って頂きたいし、これを将来どういう形に伸ばしていくかについても、たくさんのお考えを、「モア・ラブ中川根」や「四季の里」へお寄せ頂けたらありがたいと思っております。



ふる里の山は

山下静男

「山の子が、山を想うが如くにも、悲しきときは君を想へり。」
「ふる里の山に向いて言うことばは、ふる里は有難きかな。」
などと、啄木が歌った頃には比べると、ふる里との距離は、日本中どこにいても、この頃は、大へん近いものになってしまった。

新幹線や高速道路のネットワークを張りめぐらしてしまつた日本列島では、ふる里は、たつた一日の行程で日帰りが出来る地帯が多くなつた。ましてこの川根地方をふる里とする人々には、ふる里は手の届く近さになつてしまつた。何しろ日本の政治のニューリーダーと言われる人が「日本列島ふる里論」というのを唱へ出して、誰にとつても日本中がすべてふる里になつてしまつたようだ。

この様なことはやはり時代の大きな移り変りというものを感しさせる。そしてこの様な変化に恋じて「山」も又激しく変化して来ている。

この三十年來、「山」は、国策に従つて、専らその経済的機能のみが要請され、人はひたすら「杉」「松」の経済価値を求めて、山に植林して来た。だから今、川根地方の山は、見渡す限り、杉、松の緑で覆われている。つまり国の高度経済成長政策に対応して、山も又杉、松の緑でその政策にこたえて来たのである。これが、いいことか、悪いことの判らないけれど、こうなつてしまつては、われわれ林業にたずさわるものは、十年一日のごとく山へ杉、松を植へ、それを育くみ、そして或一定の樹令に達したら、伐採売却して、生活の営みも統けていかなくては、ならない。それなのに、あの高度経済成長以來、たいていの若者は、ふる里を去つてしまひ、ふる里の高齢化社会現象は、いよいよ顕著となつて来た。又、新素材の出現で新築家屋の中にしめる材木のウエイトは、低下するばかりだ。そして戦後の植林が、今漸く収穫の時期を迎えようとするとき、外材が、諸外国から遠慮会釈もなく、どんどん乗りこんで来る。林業をめぐむ状態は、まさに四面楚歌の感が深い。
活性化という言葉も、最近は大分手あかがついてしまつたが、活性化も言うは易しいが、活性化のための具体的な方策となると、われわれの貧弱な頭では、いくら考へても、うまい考へは、浮んで来ない。



終戦後、マッカーサー司令部の権力によって農地改革が行われ、これを契機に、日本経済の現在の繁栄が出現した。現在の林業危機を救うためには、これからの抜本的な対策が必要かもしれない。私はやはり故郷を出て、都会に生活する人々に、故郷の林業に参加して貰いたいと思う。つまり共有林でもいいし、自分自身で所有されてもいいが、経営管理の方法は、森林組合などにまかせるのも一案だと思ふけれど、自分も会社の休日などには、自分の所有する故郷の山へ遊びに来たりして、そんな形で、都会とふる里との林業に於ける共同経営が成り立つ途はないかと思ふ。今、とつてもない金余りの時代とかで、皆、外国の債権や、株式などを、一生懸命買っているように、せめてその十パーセントでも、ふる里の山へ投資してくれないだろうかと思ふ。

啄木の時代比べて、ふる里との距離は、近くなつたといつても、ふる里はやはり、ふる里なのだ。東京にいても、大阪にいても、その他どんな大都会に暮らしていても、その背後には、整然と植林された緑の山々があるという事は、大へん心強いことではないだろうか。ふる里へ行けば山がある。緑の山があるというものは、人間の心に深い安らぎを与えてくれるものと思ふ。
「悠然として南山を見る」のむいいが、
「悠然として故郷の山も自分が所有している山を見る」のも悪くはないと思ふのだが。

中川根町地名在住 中川根町森林組合長

それを見ると簡単に崇徳和尙さまと「中興の開山」と記してありこの出来事が、文應元年(五〇二年)であったことを知ることができるといふことである。このときから伝説は現実の交りとなり、ずいといと続き、かれこれ四九〇年近い歴史といふことになりす。

この和尙さまは、永祿元年(一五五八年)八月五日に亡くなられ、智満寺にも「当山三祖位尊崇徳和尙」と記されております。この話は伝説といふことになっておりますが、人物、年代、実在の寺院ともに記録に明らかで本来は両寺共有の歴史であるべきなのに、一番肝心の両寺を結びつけるきっかけが猫だったとは、土壇場で強烈な足掻いとくたぶりの感があります。

以上は徒来から智満寺に伝わる「説」で、もとは戦時中入寂された秋野賢成老師から鶴見賢道師が聞いた由で更にその後賢道師から明正方丈を経て私が知り得たのが伝承の順です。

徒来世間にはこれ以外、二つの異説が伝えられているが、それらはいづれもよその伝説と適当にミックスされて、伝承過程での純粋さに疑問をもたせるものであることを附言しておきたい。

歴史と伝説について

智満寺の歴史となると、さきまで南北朝争いが登場する。特に南朝をぬきにして、中世の智満寺を語ることは不可能である。「南朝と智満寺」それはまさに密接不離と言ひ言葉そのものである。従つて「土岐村」の章でも「猫檀家」の章でも同じ話が出てくるので、読む方の側としては「またか」と思うだろう。「もう聞きたあきた」といふことである。しかしだからといって、新しく目先を変えて面白いもの、あきなものにする。それはもう歴史ではなく全く異質な創作小説の領域になってしまう。歴史小説が作者によって違いが出てくるのは、歴史の史実とは別に作者の好みの脚色の違いからである。たとえば歴史学上、定説とされる名のある人物ではあつても、シナリオライター氏のペンの走り具合で、イメージもまた脱紋切り型の一味ちがつたものを提供してくれろ、ということがある。そこに作為を拒否する歴史との根本的な違いが出てくると思ふ。

「猫檀家」の猫は伝説である。歴史のにおいはしても、前詮歴史にはならない。残念ながら、通常歴史と呼ばれる枠組には、伝説の入りこむスペースなどとも無いのである。しかし、これまたさても伝説とはいへ、五百年も生きてきた猫である。たじろにしよう。

注 巷説 智満寺考 智満寺伝説 信州猫檀家より 序文及び 信州猫檀家を転載させていただきました。

出版物のお知らせ

町内 催事御案内

- 1月7日 佐沢薬師祭典。(久野脇三津間)
- 1月15日 地名阿弥陀堂祭典
- 1月17日 千葉山 智満寺大般若
- 1月27日 瀬沢金山神社祭典
- 1月29日 愛宕地蔵尊祭(旧正月、下長尾)
- 2月2日 初午 各地区お稲荷さま
- 2月7日 原山千頭堂祭典

1月7日、午前中降り続いた雨も上がり、薬師さまのお祭りが行われました。地元の人々に受け継がれたひんぼりも行われ、夜も白むまで、祭は続きました。

次回号では、三津間地区を、紹介します。



ご希望の出版物がありましたら、何かを、はっきり書いて下さい。送料について、

小色料 500円は、ふる里通信5号と、中川根町の屋号、むかしむかしくわき、信州猫檀家、全部おくれます。郵送料、240円は、ふる里通信5号とむかしむかしくわき、信州猫檀家まで送れます。

ふる里でしか発行されない出版物は、これからもご紹介いたします。--- あなたのしみに---

- 中川根町の屋号 編集発行、町史研究会 B5版、100ページ位、660字記載。別紙、発刊の言葉参照。代金、500円、送料(小色)500円。
- 申込先は、中川根ふる里通信 郵便振替口座〈名古屋〉7-81556 又は、428-03 封書にて切手同封。静岡県榛原郡中川根町上長尾859-6 川沢節子 宛
- ※ 申込み×切日 2月10日。
- むかしむかしのくわき、発行者 坂本勝平(故人) A5版 32ページ。久野脇の昔からの様子がわかります。本を制作するに際しては、久野脇区の方さん、旧久野脇川、諸先生方、坂本さんのご協力で作られました。コピー版、無料、送料 240円。

- 巷説、智満寺考、智満寺伝説、信州猫檀家 B5版 13ページ、発行者 河村計三。信州猫檀下のほかに、中世の智満寺の周辺と、そのありまし、かくわき書かれています。コピー版、無料、送料 240円。
- 発送は、次回ふる里通信 発刊(4月予定)の時、に致します。(横へ行く)

小川恵吉詩集「アルメロの少女に」を読んで

長塚 誠

川根には画家も、音楽家も、一人の詩人もいない、という諦めに似た感情が私にはある。川根は芸術と無縁な風土!!
ところが、私は一人の詩人を発見した。今は焼津にお住まいである。(出身は田野口)序に「詩人でもなく、私は詩か書くことができない。」と書かれていた小川さんはまさにもない詩人です。
現代詩の困難さは、人間の意識への重圧感が増す中で、言葉への信頼感の欠如といえますか、希薄化と回転の中にあるといえます。

重さを失った言葉で / 少女たちは今日も / 唄っている
少女たちの知らない時代から / 少しずつ変化を繰り返している風景のなかで / 海の広さと、川の流れ / あるいは街や村のたたずまいは / あきらかに形態を変えている / 水や空の色さえも
少女たちの心が無意識のうちには / とろえているのは / そのうちのいったい / 何だろうか

少女たちは唄っている / 重さを失ったそれらの言葉で
少女たちの知らない / 遠い時代では / 心は言葉と一緒だった
ことを / まるで知っているかのように
(「言葉のなかに住む少女 II」) / 榎まかり

氾濫ともいえる言葉のいや突は言葉の不在の中にある私達の日常が見事に表現されている。言葉の集中力の結晶である詩さへも拡散に脅かされるのだが、小川さんは無理なくとり込むように詩として定着させている。

定期購読のお願い

- * 中川根ふる里通信は有料発行です。(一部送料100円)
- * 皆様の定期購読申し込みがこの通信の発行を支えます。
- * ふる里出身の友人知人に「中川根ふる里通信」を紹介して下さい。お申し込みは郵便振替口座をご利用下さい。
- * 申し込み先 〒428-03 榎原郡中川根町上長尾990 中川根ふる里通信

この詩集には青年期の習作、中期の力作もおさめられている。詩句の中に「村」を見つけた時、小川さんの脳裏と私達のそれは、共有のものに違いない、と思わずにはおれません。
(「アルメロの少女」)
樹海社 1986. ¥1,200.-

かたふ

皆様と交流いただきまして早一年、こころも一生懸命頑張りました。どうぞ一層の御指導お願い申し上げます。そアラブ中川根ふる里つくり一同



この冬は例年になく暖かいです。早くもよむぎやふまのとうが芽ばえはじめてきた。三月ごろには、奥波襲来のどんぐりがえいかなければよいと願っています。

母校は今シリーズで奈良間辰夫さん宅においでしました。長年間教職をなさって、中川根中学校校長を最後に、司法書士になられた七十五才の今も若々しく活躍なさっております。先生がおっしゃった「私は教職に就いてからずっとこの職業にむいていないのではと悔んで来た。今もそう思っている」と、そして「若い時から、今まで何の進歩も無い様に思われる」と、純粋で誠実な人だと思ふ。今後一層のご自愛されて、いつまでも私達の先生でいてほしいと願っています。

ふる里通信 第四号 おとどけします。今年も全国のふる里通信購読会員のお声を聞きたいと思っております。御意見御希望、ありましたら御連絡下さい。ふる里にも俳句の会、和歌の会、町史研究会、などふる里の香りを趣味、学習しているグループがあります。そのグループとの交流もアラブ中川根でお世話したいと思っております。

訂正 ふる里通信 第三号 母校は今、改名小学校の内容で農業用水路開鑿水田造成(明治三十二年)と(明治十二年)に訂正させていただきます。申しわけありませんでした。